

病院 心臓病に強い 探訪

心臓病には、冠動脈が詰まる心筋梗塞など救急救命を必要とする病気や、心臓弁の機能が低下する弁膜症、血管につながる大動脈疾患などさまざまな病態がある。いずれも手術による治療法は確立してい



るが、さらにハイレベルな技術向上を実現しているのが、帝京大学医学部附属病院心臓血管外科だ。救命救急には24時間体制で対応している。狭心症の血流を再開する冠動脈バイパス手術では、人工心臓を使わないオフポンプ手術はもとより、患者

の状態に合わせて、手術とカテーテル治療を組み合わせたハイブリッドな治療も行う。さらに、僧帽弁閉鎖不全症では、通常は胸の中央を開いて手術をするが、右乳房の下から6センチ程度のキズで治療す

帝京大学医学部附属病院心臓血管外科

低侵襲手術で患者のQOLを守る

「患者さんの中には、手術後にライフスタイルが変わることを心配される方がいます。低侵襲手術は回復が早く、短期間で社会復帰もできるため、患者さんに安心して治療を受けていただくことに貢献中だ。」(安達純子)

るなど、身体への負担の少ない「低侵襲弁膜症手術」を実践している。「心臓につながる大動脈の弁閉鎖不全にも、右脇の辺りからアプローチする低侵襲手術をしていきます。治療効果と安全性に注意しながら、患者さんの術後のQOL(生活の質)向上に貢献するのが目的です」

こころ話す同科の下川智樹主任教授(49)は、心臓血管手術のスペシャリストである。心不全や大動脈解離など命に関わる症例の手術を数多くこなす。その一方で、早期の僧帽弁閉鎖不全症に対しては、無症



手術支援ロボットさらに改良

帝京大学医学部附属病院は、昨年2月、最新の手術支援ロボット「ダヴィンチXi」を導入した。以前から第2世代の「ダヴィンチ」を使用していたが、今回は第4世代でポートなどが改良されているという。同病院の心臓血管外科では、冠動脈バイパス術で使用する「内胸動脈」を取るときなどに「ダヴィンチXi」を使用している。胸を大きく切らずに済むのが利点だ。同院は、日本胸部外科学会「ロボット心臓手術関連学会協議会」の数少ない認定施設になっているだけに、今後の治療の発展に期待したい。

〒173-8606 東京都板橋区加賀2の11の1 電話/03・3964・1211

「低侵襲手術の実現は、技術レベルの高さに加え、医療機器の進歩も後押ししている。医療機器では、同科は、最新の手術支援ロボット「ダヴィンチ」も導入した。しかし、下川教授は新しい医療機器の使用には、慎重な態度で臨んでいる。「私たちは、人の手で行う低侵襲手術の技術を確立していきま

す。手術支援ロボットは、人と同じような感覚がないなど、まだ改良されるべき点が残っています。安全性や有効性を確かめながら、新たな治療法を進展させたいと考えています」と下川教授。患者に役立つ新技術の発展に貢献中だ。(安達純子)